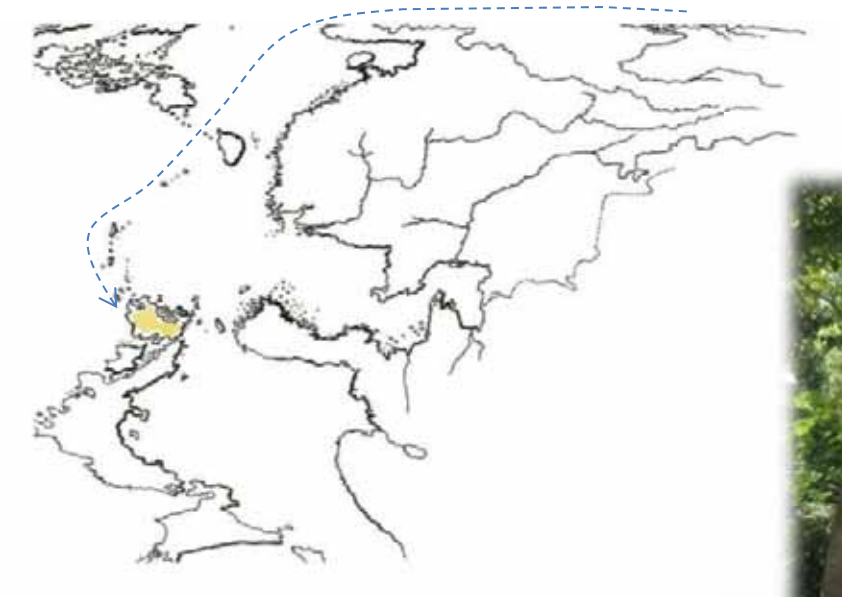
コトバはタイムカプセル
インドから日本語をもたらせた「猿田彦」に因む九州の地域づくり



福岡県築上町
金富神社
猿田彦大神の
石碑が林立する

プロローグ

- **日本語の始源はパーリ語である。**
- パーリ語は釈迦仏教上座部の布教団によって日本にもたらされた。
- 布教団は**水田稲作**と**蹈鞴**（タタラ・吹子）**製鉄**を媒体とし布教を行ったことから、これらの知智技術は短期間に日本全国に広まった。
- この時にもたらされた**釈迦の哲理**（宗教ではない）は、日本民族の基層となり**「二元的対立の超越による分立・相和・共存」**という「平和」を生み出す。
- この真理を遵守することで日本は唯一2000年を超える「一国家一君主」を守護することができた。
- 日本民族の根本は**釈迦の哲理**（右表）の真理の遵守であり、この理念は不変・普遍のものとして発信されなければならない。

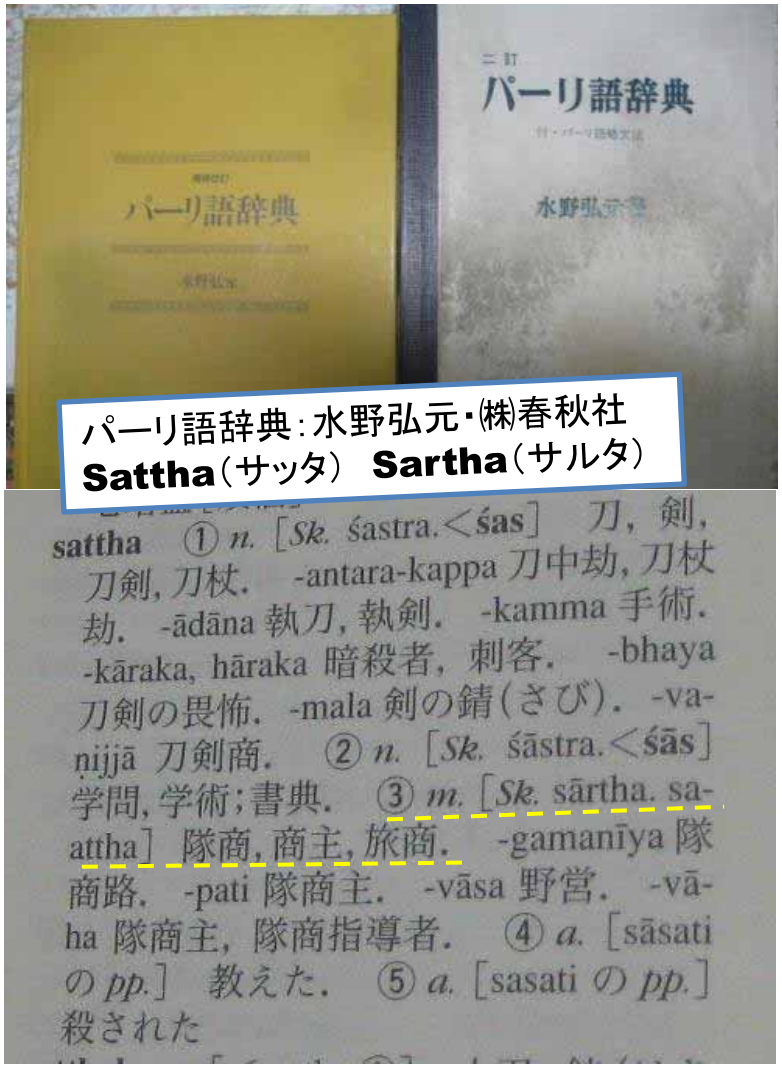
「二元的対立の超越に導く釈迦の哲理」

三知	理智・慈悲・平等
三智	知足・共棲・而遊
八正道	正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定
五戒	不殺生・不虚言・不盗奪・不姦淫・無所有
三宝	仏・法・僧（集合・結合・僧団）

＊この提案は釈迦の哲理を基本とし、パーリ語による解釈等において、宗教的な記述と思われる箇所がいくつかあるが、あくまでも、地域づくり・まちづくりを目指すものであり、宗教上の提案ではないことを最初に断っておきます。

1.はじめに

- 日本語の始源はパーリ語である。
- BC230年頃、パーリ語で示された釈迦仏教の教えとともに、布教団の先導者である「猿田彦」がスリランカから北ベトナム、そして南西諸島を経て九州に至ることに始まる。
- 布教使徒は
  マヒンダー族（インドマウリア朝アソーカ王の王子）で水田稲作を司る。
  サルタビコ族は**蹈鞴製鉄**を司る。
- サルタビコ族の主権者を猿田彦と言い、九州が日本における始源地であることから、九州全域の祭事や神楽の先導者として現在に至る。
- この猿田彦に因む足跡・祭事・理念等について「パーリ語による解釈」を礎として、九州の地域づくりを提案します。



広辞苑「パーリ語」：スリランカ・ミヤンマー・タイ等で仏典に用いられた言語。プラークリットの一つ。インド・ヨーロッパ語族のインド・アーリア語派に属する。巴利語。

パーリ語による解釈の例① 「コトバ」(言葉、詞、辞)

・ko　　tvo　　vah

koti	tu	-vosana	vahati
頂点	而	完結	もち来る
		-vokinna	もたらす
		充ち満ちる	

・kautubha

儀軌（教誡・規則・方法・図像約束・修行戒行法）

儀式書（密教の供養方法・規則・実修法等を記録したもの）

音節の区切り方で複数の解釈ができます。

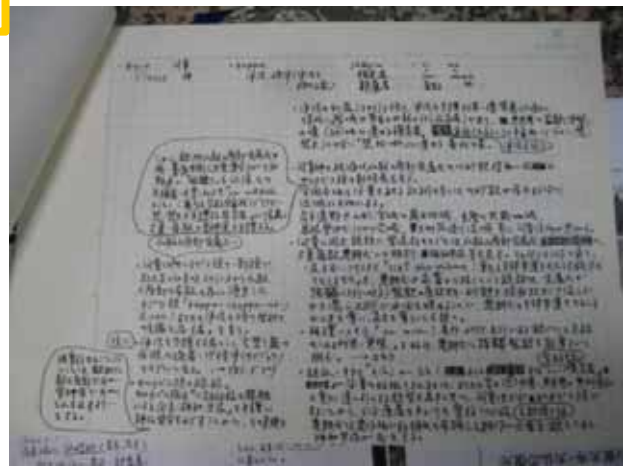
【解釈】

・かく覚慧の完結をもたらす、認識や伝達や記憶・記録の方法としての頂点たる表現手段。

・釈迦仏教の儀・軌や儀式について、衆生・在家者・修行者・比丘・比丘尼に伝達・教導・認識・記憶せしめる為の表現手段。

「言葉の力」

言葉の真意を解くことで、地域未来が見えてくる。地名・人名・行事・祭事・催事・生活・風景・諸文化に因む言葉は、神通・神変をもたらし「イノベーション」に導く。



パーリ語による日本の風土・文化等に関する解釈の原稿

パーリ語の解釈の例②⇒日頃親が子供に使っている言葉等

- **シッカリ**
  sikkha li
【解釈】学問に執着すること

- **マナブ**
  manna　bhu
  mannati　bhaveti
  思考する　修習する
  思惟する　あらしむ
【解釈】思考し思惟する力を修習すること

- **ガンバル**
  gam　　varu-
  gacchati　　vara-ud-
  向かい行く　願望　より上の
【解釈】より上の願望をもちその達成に向かい行くこと

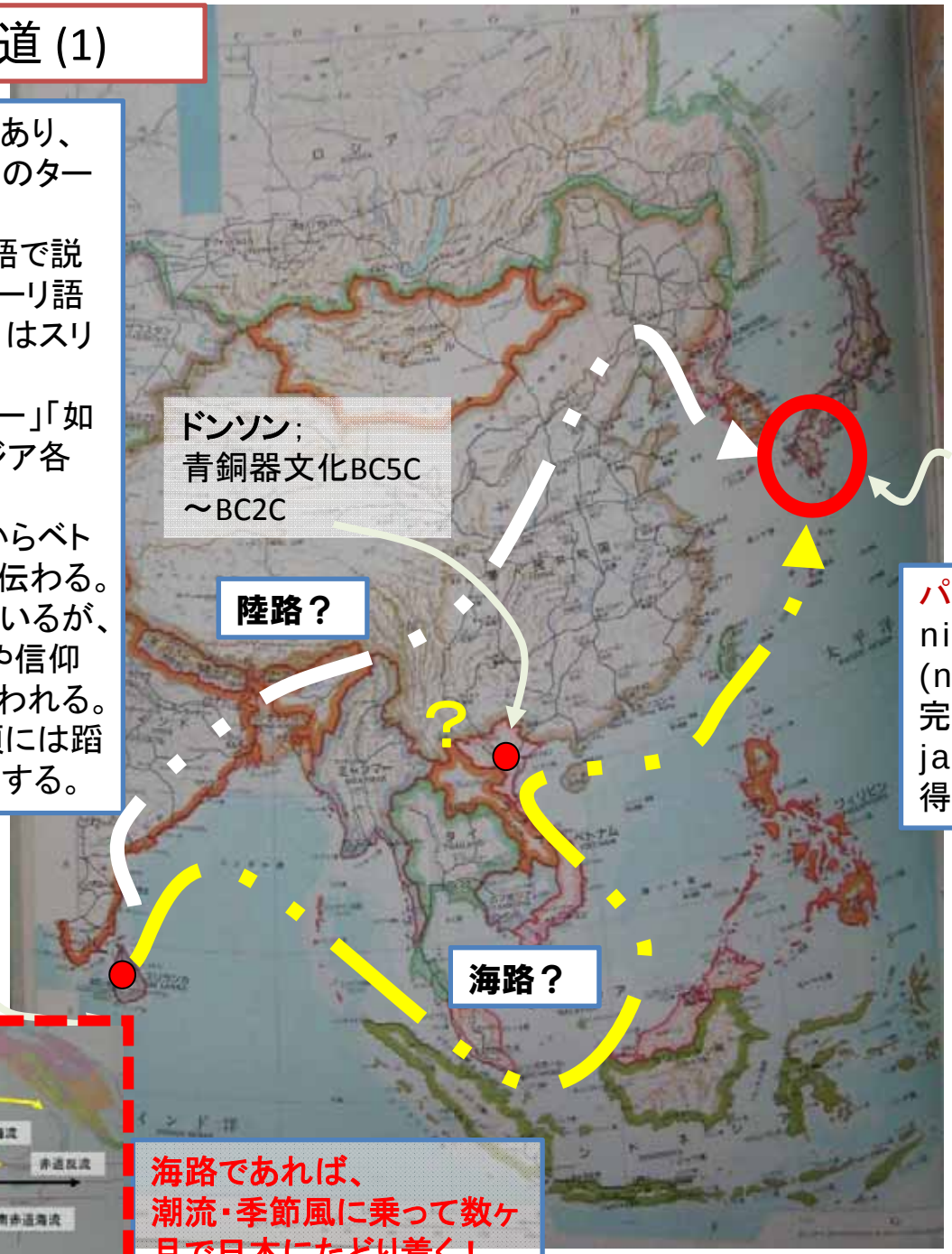
- **ダイジョウブ**
  da i jo bhu
  da:与える
  i:向かい行く
  jo:輝く
  bhu:生存す、
  　幸せになる
【解釈】輝きに満ちる人生を実現し、幸福に向かい行く力を与える、そのことを約束することば。

【因みに】

- **オモテナシ**
  vo-　vosana:完結
  mvo- muti-vokina:覚慧　充ち満ちる
  te　ti:それ　三、三知、三智、三宝
  nah nayahati:結べる
  si　su:善行、妙行、良行
【解釈】それ充ち満ちる覚慧(直感と分別)の完結を以て、善行・妙行・良行と結べること。

2.猿田彦の来た道 (1)

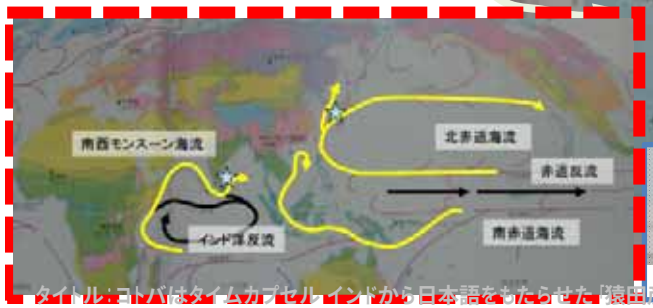
パーリ語は釈迦の母国語であり、北部インド（現在のネパール）のターライを本拠地とする言葉。
釈迦は多くの哲理をパーリ語で説き弟子によって記録されたパーリ語経典（ダンマパダ法句経など）はスリランカに渡り保存される。
教えは「不立文字」「多聞第一」「如是我聞」という口承を以てアジア各地に伝えられる。
BC230年頃にはスリランカからベトナム・南西諸島を経て日本に伝わる。アジア各々の語群を形成しているが、固有名詞や表意言語、習慣や信仰についてはパーリ語が多く使われる。
サルタビコ族はBC1000年頃には蹈鞴製鉄に携わり、各地に展開する。



ニッポン
ジャパン
九州
（チクシジマ）

パーリ語解釈
nipphan
(nipphanna)：
完全なる国
jap pa-nu：知智の修得を熱望する国

スリランカ
（シラーン、シハラ）



海路であれば、
潮流・季節風に乗って数ヶ月で日本にたどり着く！

タイ北部・ラオスはタイ人カレン族がインドから日本語を持ち込んだ「猿田彦」に因む九州の地域づくり　対象地：福岡県　分類：まちづくり支援システム

2.猿田彦の来た道(2)

姶良・アイラ「ayira (ariya): 高貴の神聖な，アーリヤ族」や有明・アリヤケ「ariya ku (kucchi) ve:高貴なアーリヤ族の実なる始源地」

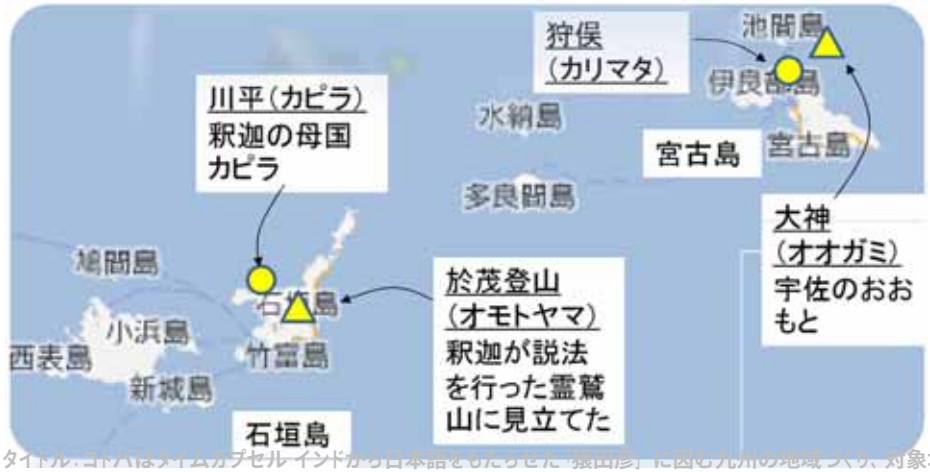
萩市にも御許町(オモトマチ)がある

久高島・クダカシマ「khuddaka sima:釈迦の説いた雑色(種々雑多)の詩句を守護する結界・戒場・教区」

BC220年代
サルタビコ族の釈迦仏教上座部の布教と鉄器の普及

オモトの繋がり

御許山・オモトサン「vo-mut (mutti) sam-:共に正しく集り，解脱を成就する戒場」



佐賀・サガ「sagga:天，天界，天国」，大牟田・オオムタ「vo-mutta:解脱を成就できる戒場」，鳥栖・トス「tus (tussati): 無所有の制戒を遵守し知足に勤しむ所」

タイトル：コハはメイムカプセル インドから日本語をもたらせた「猿田彦」に因む九州の地域づくり，対象地：福岡県，分類：まちづくり支援システム

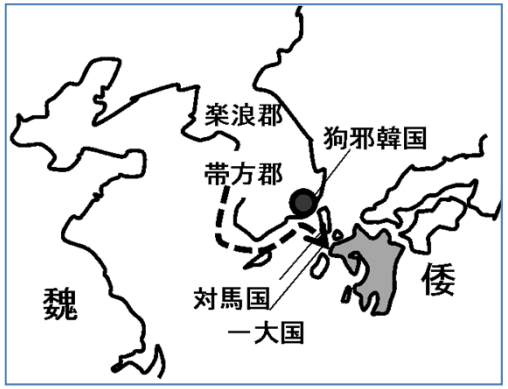
3. 猿田彦の足跡

猿田彦族は、BC222年頃には九州全域に展開し、鉄を媒体として釈迦仏教上座部の布教をはかり、ついで韓半島に至る。その裔が新羅や駕洛の祖となり、AC186年頃の「邪馬台国・卑弥呼：倭国・神功皇后」と魏の国交を可能とする。

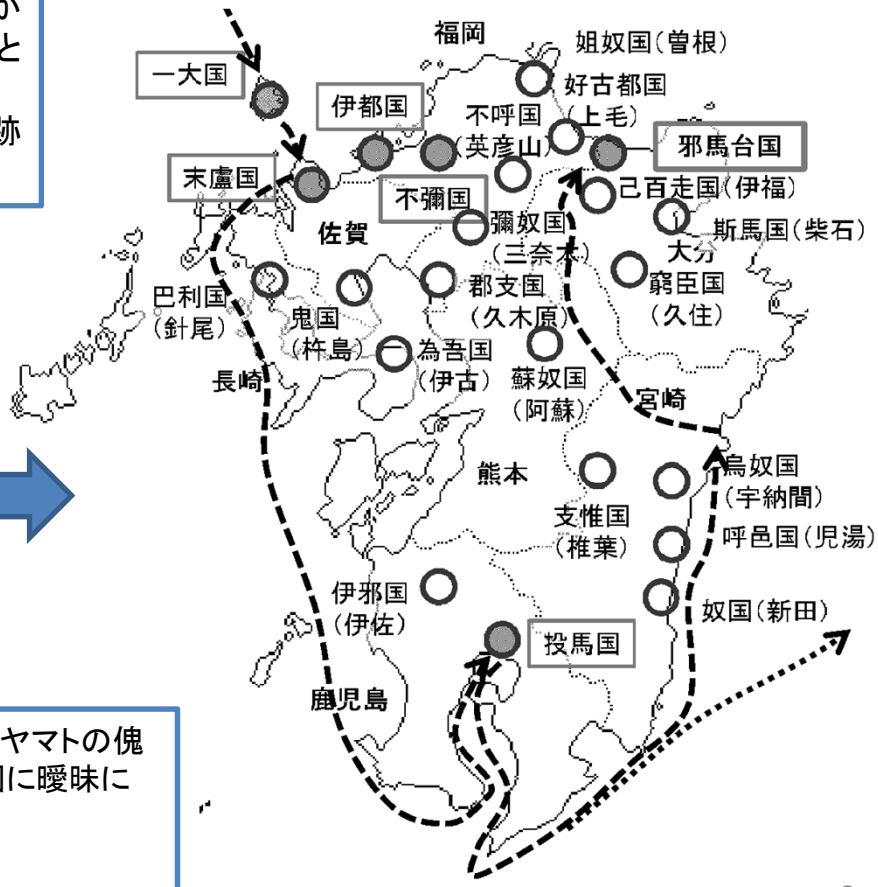
●パーリ語による「魏志倭人伝」の解明・研究と知的観光

魏志倭人伝は日本古代史に関わる最古の文献であり、パーリ語の解釈を加えることで邪馬台国や卑弥呼の実体が明らかとなり、これからの朝鮮半島や中国との文化交流に資することができる。

その拠点を「豊国」とし、九州全域に存在する猿田彦の足跡を「知的観光」の対象とする。



魏志倭人伝に記された倭国諸国の地名解釈斯馬国（シバ：大分柴石），己百走国（イハク：イフク：大分下毛伊福），伊邪国（イジャ：イザ：鹿児島伊佐），郡支国（クギ：福岡久木原），彌奴国（ミナ：福岡三奈木），好古都国（コウゴ：コウグ：コウゲ：福岡上毛），不呼国（ブコ：ビコ：福岡英彦山），姐奴国（ソヌ：ソネ：福岡京都曽根），対蘇国・蘇奴国・華奴蘇奴国（ソ：熊本の阿蘇地方），呼邑国（コユ：宮崎児湯），為吾国（イゴ：長崎島原伊古），鬼国・鬼奴国（キナ：キネ：佐賀杵島），巴利国（ハリ：長崎針尾），躬臣国（クジ：大分久住），支惟国（シイ：宮崎椎原・椎葉），烏奴国（ウナ：宮崎宇納間），奴国（ニャ：宮崎新田）．
奴・ナ（ニャ）は「jna：智慧」を意味し，その南に位置する新田原（ニュウタバル）や西都原（サイトバル）



邪馬台国は神功皇后（国際名卑弥呼）がヤマトの傀儡（クグツ：小さな守護者）国家として魏国に曖昧に紹介した。
⇒各所の邪馬台国説につながる。
⇒「九州説」「宇佐」の解釈。

猿田彦が築いた「クニ」

4. 九州の地域づくり・まちづくり

(1) パーリ語による「まちづくり」「夢」「アイデア」の解釈

- **まち**
  ma: はかる　ci:　集積
  【解釈】知智・情報・財富の集積をはかる所
- **つくり**
  cyu:頂点を結べる kR:作る・行う li:執着する
  【解釈】ものごとを作り行うことに執着し頂点をめざすこと
- **夢**
  yu:結べる　me:　自我（個性・特性・唯一性）
  【解釈】自我と結べること
- **アイディヤ（アイディア）**
  a-:遵づる・従う　iddhi:神通・神変 ya:向かいゆく
  【解釈】神通・神変に遵じて覚慧（直感・分別）に向かいゆくこと

- **夢をもってまちづくりをはかる：**

  個性・特性・唯一性に遵じて、知智・情報・財富の集積をはかり、最上の成果に執着すること。

- **アイデアを持ってまちづくりをはかる：**

  人智を超える神通・神変に頼り、神の啓示である覚慧（直感と分別）によって、知智・情報・財富の集積をはかり最上の成果に執着すること。

(2) 猿田彦のもつ神通・神変（アイディア）

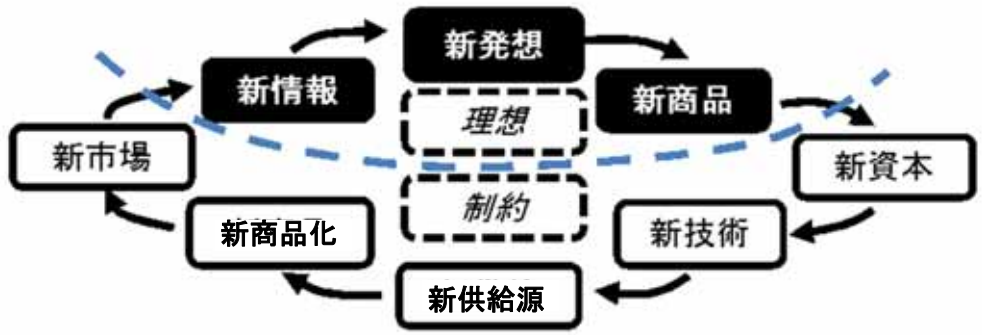
- 猿田彦がそなえる「二元的対立の超越」、「分立・相和・共存」と言う、神通・神変（天啓：直感・分別）の理念に従い「村」をつくる。
- 村の名は「猿：エン」に因み「**縁の村**」とする。
- 「**縁の村**」はパーリ語で「知智・情報・財富等を分かち合う根源の空間」を言う。
- **「縁の村」は九州全体に展開する「村」の総称で、個々の村には個性・特性・唯一性のある名前をつける。**

- 「縁の村」（エン　ノ　ムラ）
  veyy-　　nu:
  分かつ　知智
  no:
  確実に
  mula
  根、根本、根源

【解釈】
確実に不変の知識と応変の智識を分かち合う、根本の集団・領域。釈迦の哲理に従う理想の村。

(3)「縁の村」

- 九州全域において、猿田彦の足跡が残る地域や場所に**「縁の村」**をつくり、**「個性・特性・唯一性」**を発揮すると共に、そこで集積された知智・情報・財富等は、そこに住む人やそこに縁のある人に平等に分たれる。
- **「縁の村」**に因む人は、**「二元的対立の超越に導く釈迦の哲理」**に従うと共に、**「成長に代わる新しい価値創造の仕組み・知智拡伸：イノベーション」**に努め、それに費やされる智慧・労力・時間、そして成果の全ては**「分かち合い」**の対象となる。
- **「縁の村」**では、**「草・木・鳥・獣・虫・魚・微生物・菌類」**との縁を結ぶため、知足をはかる「共棲農法」とし、農的生活を愉しむ**「而遊（ジユウ）農法」**とする。
- **「縁の村」**の家は、知足に基づく**「小さな家」**とし、工房や小店をそなえる**「而遊の家」**とする。
  又、旅人のため**「小さな家」**を手作りし、安く提供して長期滞在や定住をうながす。
  世界中の人が訪れることで、猿田彦の理念は広く発信される。
- **「縁の村」**の耕作放棄地・原野・里山が、小さな家（ねぐら・庵・巣）や共棲農業・而遊農業のキャンバスとなる。



・「衣・食・住・遊・学・癒・藝術・縁」に因む新商品の開発
・「草・木・鳥・獣・虫・魚・微生物・菌類」と人々との共棲に因む新商品の開発

成長に代わる新しい価値創造の仕組み・知智拡伸

(4)「縁の村」の小さな家

1. 「共棲農法」：草・木・鳥・獣・虫・魚・微生物・菌類の空間と時間を妨げること無く，共棲して農的生産をする。

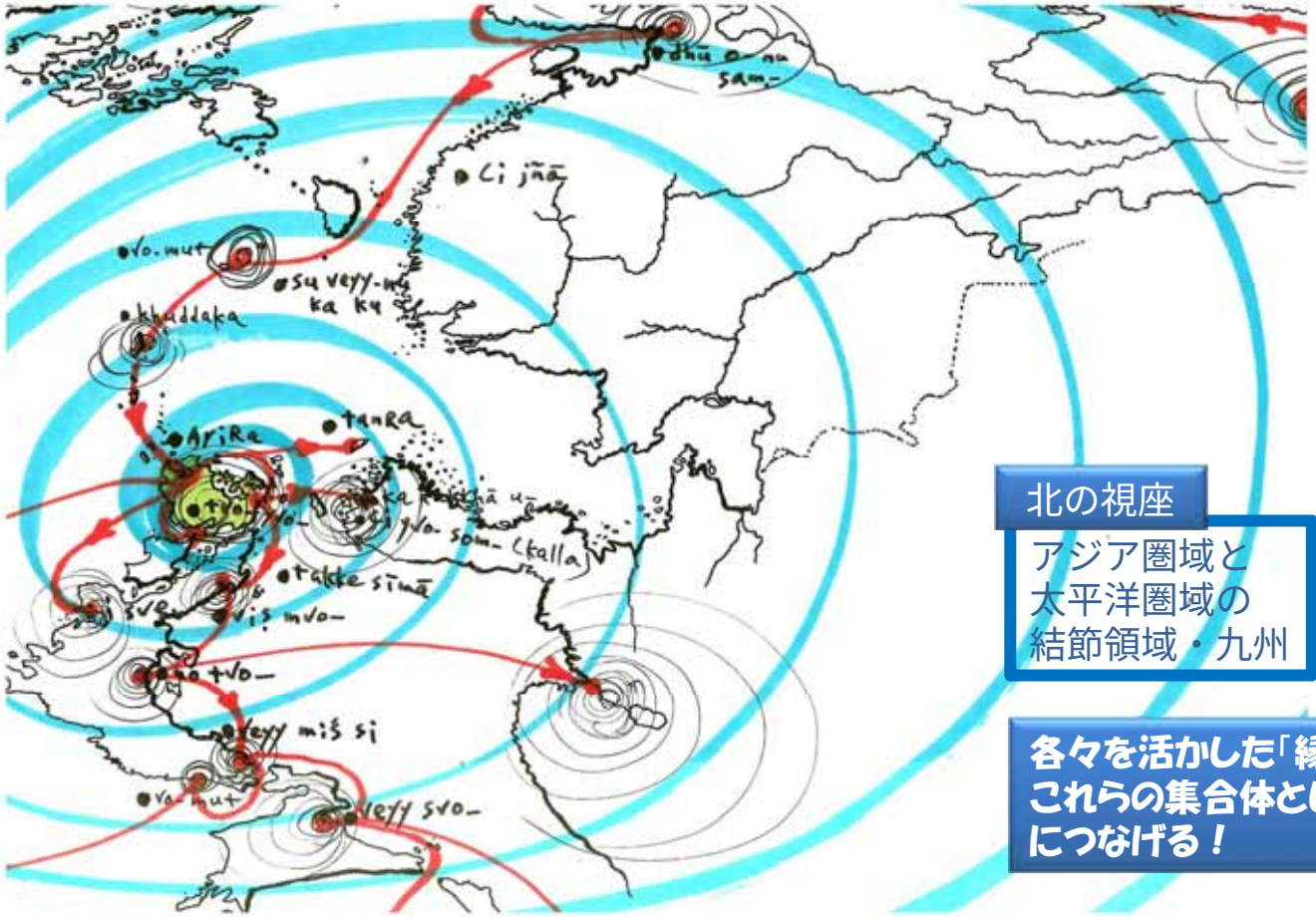
2. 「農的生活」：「知足・共棲・而遊」の真理に遵じて最小限の農的生産を行うと共に多種多様の生物との共棲を量り，それらが相剰することで生まれる風景（風土と景色）を資産に位置づけ，その中で藝術性の高い而遊（ジユウ）の暮らしを営む。
（参考資料1）

3. 「知足・共棲・而遊」の暮らしを守護した先人・先達は，そのほとんどが農的生活を基本とし，手作りの家（ハンドメイド・ハウス）に住む。
（参考資料2）

＜バリ島のルマトコの例＞

5.【提言】九州から世界へ・九州から未来へ

- **釈迦の哲理と猿田彦の理念**
  「二元的対立の超越による分立・相和・共存」
  を九州から世界に発信する！



北の視座

アジア圏域と
太平洋圏域の
結節領域・九州

各々を活かした「縁の村」つくり
これらの集合体として、地域力
につなげる！

（参考資料1）農的生活の実践者

福岡正信

- 不耕起直播と粘土団子による自然農法を実践する．土を耕さず，無肥料，無農薬，無除草に徹することで土中の微生物との共棲を量る．アジア・アフリカ諸国の砂漠緑化にも関わり，アジアのノーベル賞と言われるフィリッピンのマグサイサイ賞やインド最高栄誉賞を受賞し，その著書「わら一本の革命」では農における「人為無用・人智無用」を説き，世界各国で翻訳された．

永田照喜治

- 焼畑農業を視座とし，植物の「吸収根」を育てることに徹する「緑健農法」を確立する．植物の根系は他の植物の根系と絡みあって複合し，そこに地中の微生物や菌類が発生し根の活性化・生体の成長を促進すると説く．そのモデルは山地森林であり，少灌水・少施肥・少雑草を基本とする．

川口由一

- 「植物動物同時作」に因む米作りに勤しむ．収穫後の田に水をはる「冬みず田圃」により水生生物を繁殖させたり，それを肥料に位置づけたりして，稲種の直播・不耕起を実践する．

- 木村秋則

- リンゴの無農薬栽培法を確立する．山地に育成する植物が共棲することによって豊かな実りを果たすのを観てそれに習う．無除草を基本とし，リンゴの成熟期に草を刈ることで地熱を下げ，リンゴに完熟時を覚知させ収穫する．

泉　清一

- ミカンの無農薬栽培法と植物動物同時作を確立する．ミカンの葉を食草とするアゲハチョウの幼虫をたべるクモ・トカゲ・鳥類を生成させるため，無農薬・無除草を基本とする．彼等の休眠期に一定領域の草を刈り取り，それをニワトリの飼料とすると共に，微生物の豊庫である鶏糞土はミカンに与える肥料とする．藤原誠太
- 日本在来種ミツバチ（ニホンミツバチ）の育成に尽くす藤原養蜂場の三代目で，多様の植物とミツバチとの共棲（虫媒増殖）を量る．農薬（ネオニコチノイド等）の影響が少ない山地や無住化集落（全国に5千集落あるとされる），農薬が撒かれることの無い都市域（公園や街路・河岸等）でニホンミツバチを飼育する．
- ニホンミツバチは2km程しか飛ばず，その距離を確保すれば慣行農業に犯されることは無い．それに比べて西洋ミツバチは4km程を飛ぶため農薬汚染から逃れにくい．改良西洋ミツバチの蜜量はニホンミツバチの10倍とされるが，その量よりもニホンミツバチの蜜の安全性と味・栄養を重視して養蜂する．

中洞（ナカホラ）正

- 岩手岩泉で周年山地放牧に徹し「山地酪農」を行う．山地酪農法は猶原恭爾（ナオハラキョウジ：植物学者）が提唱し，放牧家畜の心身を健康に育てると共に，国土の67%を占める山地・林野の保全に貢献するとされる．このことから酪農を楽農：楽しい酪農と称している．

- 中村義幸

- 鹿児島肝属で休耕田・耕作放棄地・放棄竹林・放置林等を利用し，豚の放牧を行う．豚が「耕した大地」はその排泄物と排泄物から生ずる微生物等によって肥沃な水田や畑となり，無肥料・無農薬の作物を作る．

岩澤信夫

- ジャポニカ種のイネは移植に適した品種であることを発見し，「不耕起移植農法」を確立する．コンバインで米を収穫した後の切りワラを水田に放置し，深水管理してソウ類やプランクトンの発生をうながす．水田を耕さない為，イネの根穴は保存され不耕起田の作土はスポンジ状の構造になり酸素や栄養に富んだ土になる．苗は低温の厳しい環境で5葉程の成苗に育てた後，不耕起田に移植する．この農法は，イネの環境適応能力を飛躍的に高め，減肥料減農薬で1反当たり600kgの収穫を果たす．

高橋延清

- 北海道東京大学演習林で36年間林長を務め，「林分（リンブン）施業法」を確立する．その6原則は次の通りである．
- 天然林は各林分が極盛相の直前まで早期に到達するように誘導すると共に，このステージで回転させる．途中相の森林はこのステージに向うよう施業する．
- 天然林はその生態系を広域的に強引に破壊しないよう注意する．その為には「観察」を基本とする．
- 天然林は無数の異なる林分で構成されているから林分の構造・動態に応じて総合機能が発展するよう画一的な施業を避ける．
- 天然林を最高の総合機能を持つ高多層林に誘導する．特に陽光を最初に受ける最上層の樹木を量的質的生産性の高いものへと導く．
- 遺伝的に悪い木は淘汰し優れた木を育成する．天然林から良木だけを択伐すると森林の遺伝子構成は劣化し，不健康な森林になるのでそれを避ける．
- 地力を維持し諸害に対して抵抗力の強い成長性の高い複層林をつくる．林床の状態・樹種・木の成熟度をよく知ることで，多様の生物群が調和して循環する森林生態系を維持することが出来る．複層林や多相林には「自己施肥作用」と「自己調節作用」がありその摂理に基づいて施業する．
- 「林分施業法」に基づいて創られた東大演習林・2万3千haの樹海は，森が持つ力「共棲力・生産力・環境保全力等」に対して，わずかな人力を加えた世界最大級の「共棲林」とされる．
- 三重紀北の速水亨（速水林業）・諸戸正和・吉田正木等は高橋延清にならった林業に従事している．
- これらの森林は生物多様性から「観光森林」としての効果を発揮している．

西岡京治（ニシオカケイジ）

- 「ブータン農業の父」と称せられると共に，ブータンの理念であるG・N・H（Gross National Happiness：国民総平和）の創始者とされる．「ダショー」の称号を受け「ダショー・ニシオカケイジ」と呼ばれて国中から崇敬される．1964年にブータンのパロに実験農場「ボンデ・ファーム」を設立し，12歳の少年達を中心に実習生を募って農教育を行う．ここでは穀物・野菜・果樹の種子生産を行い，その種をブータン全域に配布し，それまでトウガラシを野菜として食する程度の食生活を改善し国民の健康増進を行う．
- トマト・ニンジン・細長ダイコン・カリフラワー・インゲン・キャベツ等の多くの品種の種を持ち込むと共に，農業の機械化をはかりブータン農業の基盤を確立する．「良い種があればどんな悪条件の所でも作物は必ず育つ」という信念を貫き，焼畑で荒廃し極貧の村・死の村と呼ばれていたシェムガンを復興させる．
- 焼畑に固執する村人に800回に及ぶ集会を以て啓蒙啓発し，「定住」こそが村の復興の第一であると説く．定住を可能とする為には食の自給が第一であるとして水田60haを開発し，ついで橋や道路や灌漑施設を完成させる．この経験から西岡は成功するためには「どこにスイッチを入れるか，成功不成功はそれにかかっている」と言う確心を得る．そのスイッチは定住を可能とする「家」と「知足：これで充分と言う足るを知る覚慧」であるとし，その始源は「良質で多様の種」を作ることだとする．
- 1992年59歳で没す．葬儀は国王ジグメ・シンゲ・ワンチュクが取り仕切る国葬を以て行われる．西岡が創始したパロの実験農場「ボンデ・ファーム」は現在「ブータン国立種苗センター」として，ブータン各地に良質で多様の種苗の供給を続けている．「種苗と大地を守ることだけが家を守り国を守ることを可能とする」としている．

森喜作

- 日本のシイタケ栽培は南西諸島域から飛来する種菌に依存するしかなく，その収穫は不安定だったが，「純粋培養菌種駒法」を開発し，山村の経済自立に貢献する．

（参考資料2）「知足・共棲・而遊」の暮らし　の実践者

- 宮澤賢治とイーハトーブ
- 萱野茂と二風谷
- ポールラッシュと清里
- 藤門弘，宇土巻子とアリスファーム
- C.W.ニコルと黒姫の森
- 田渕義雄と寒山の森
- 稲本正とオークビレッジ
- 玉村豊男とヴィラデスト農園
- 荒川じんぺいと八ヶ岳南麓・自分の森をもつ倶楽部
- ヘンリー・D・ソローとウォールデンの森
- 赤毛のアンとプリンスエドワード島
- インガルス一家と大草原の小さな家
- ターシャ・チューダーとターシャの庭